

## 物性物理学 – 38年間のオデッセー

私が大学に入る頃は、学園紛争の真最中で大学はロックアウトされており、私は物理学はおおむね独学（ランダウ-リフシツの教科書などを使って）から始めた訳です。大学院からは東大にお世話になり、上村洗先生の指導の元で1978年に博士号を得て以来、助手、イギリスのケンブリッジ大学キャヴェンディッシュ研究所、筑波大などを経て、1986年から理学部のファカルティーになりました。以来、世界のトップの物理学科の一つのメンバーとして、国際交流も含め楽しんできました。理論と実験とのコラボ、化学とのコラボや、他機関（ISSR、IPMU）の方との共同研究やシンポジウム共催、そして国際共同研究なども。

この数十年は、物性物理学の一つの黄金時代ともいえ、何度も思いがけない新たな波が到来し、私自身も超伝導、トポロジカル系、物質設計、非平衡などの理論に力を入れてきました。超伝導一つをとっても、日本から発信した新超伝導体が数多くあり、面白いフェーズだとも思います。私自身、鉄系超伝導の理論を、研究歴の一つのハイライトとして楽しみました。また、超伝導、強相関、トポロジカル系、物質設計、非平衡といった一見異なるテーマが、互いに意外に絡み合っていることに気付かされるのも長年やっている醍醐味です。また、南部陽一郎先生（理学系でも集中講義をさ

れていた）が昨年（2015年）亡くなれましたが、対称性の自発的破れといった概念は（物性から発しているだけあって）最近も多彩に探られていて、物性と場の理論の一つの接点となっています。理論は大規模計算と不可分ですが、東大のコンピュータも長年重宝してきました。

東大の際立って良い点は、学生の方が優れていること（大学院生のトップは外国のポストドクに優に匹敵する）、近年では学生に海外渡航や国際会議出席の援助が（リーディング大学院事業等により）できるのが昔からの大きな進歩とおもいます。私も、充実した研究のオデッセーを航海してこることができたのも多くの方々との研究や議論に支えられてきたためですが、一方優秀な人材（院生では21名のPhD、うち17名はアカデミア、15名の修士、また、歴代助手）を育てる幸せにも恵まれてきたのが、最良の事とおもっています。希望を述べるとすれば、国際ゲストハウスをもっと増やすこと、またさらに大きい点としては、いま困難な日本にあって、逆に開き直って大きなこと、数十年のスケールのことをするようなスタンスが特に若い世代から育てほしいとおもいます。それでは、いままでの感謝とともに、理学部・理学系研究科のますますの発展をお祈りしたいとおもいます。



青木 秀夫  
(物理学専攻 教授)

### 青木秀夫先生を送る

常行 真司 (物理学専攻 教授)

青木秀夫先生は1978年に東京大学大学院理学系研究科で理学博士の学位をとられ、同年理学部物理学科助手、1980年ケンブリッジ大学キャヴェンディッシュ研究所客員研究員、1984年筑波大学物質工学系講師、1986年東京大学理学部助教授を経て、1998年に東京大学大学院理学系研究科教授となりました。2011年からは高エネルギー加速器研究機構客員教授も務められました。この間、量子ホール効果、強相関電子系における超伝導や磁性、トポロジカル系の性質、さらに最近では物質の光励起に伴う新奇非平衡現象や冷却原子系の物理、素粒子理論との境界領域など、物性物理学の幅広い理論研究で世界的に活躍してこられました。また、東京大学の在職期間中に21名の博士論文の指導をされ、後進の育成にも尽力されました。

先生の居室に何うと、たいていはモーツァルトかそれ以前の、かなり古い時代のクラシック音楽

が流れています。ご自身ピアノはかなりの腕前で、居心地の良い部屋を見回すと、ご自身の専門とは思えない英語の書籍、ご家族と愛犬の写真、鉱物標本、化石などなど、イギリスの古き良き時代の物理学者の部屋を想像してしまいます。バリトンの洪い声で難しい理論物理の話をされるので、少しとつきにくいと感じる方もいらっしゃるかもしれませんが、クリスマスの授業では学生が教卓に置いたサンタの帽子をかぶって最後まで講義するような一面もお持ちです。実は奥様にぞっこんでお嬢様にメロメロで、学生にもそれはそれは優しい、人間的な魅力にあふれた先生なのでした。

これまでわれわれをご指導いただきありがとうございます。来年もプロジェクトを継続されると伺っています。ご退職を通過点として、ますます研究が発展されることを祈念しています。

# 金星へカメラを飛ばした：完結までまだまだ編



岩上 直幹  
(地球惑星科学専攻 教授)

65歳定年退職を3ヵ月後に控えた2015年12月7日、我が1 $\mu$ mカメラを積んだ金星探査機あかつきは金星周回軌道投入に再挑戦し、壊れたメインエンジンの代わりに小さな姿勢制御エンジン4個を使うという裏技を用いて見事成功しました。思えばあかつき計画が立ち上がったのが1999年夏でしたから、もう足掛け18年になります。当初の目論見通りならば2010年12月周回軌道投入し、その後は続々と降ってくるデータの宝の山に埋もれて、至福の5年間を金星研究三昧で過ごし、論文の山を築いて今年3月予定通りハイサヨーナラとなるはずでした。私はあかつき搭載の5台のカメラのひとつ1 $\mu$ m赤外カメラの責任者をしています。現在(2016年2月4日執筆当時)は伝送レートが復旧してデータが本格的に降りはじめようとしており、データ処理体制を固めねばとドタバタの最中です。それにしても5年前の失敗のおかげで定年後のビジョンは大狂いな訳ですが、これも人生の薬味ととらえ、楽しみが5年伸びたと思えばいいのでしょう。4月からは暇になるのでボランティアとして宇宙研に通うことになるでしょう。

手元にあるまともな1 $\mu$ m画像は、投入成功直後7万kmから撮って発表会見に使われたあの1枚だけなのですが、驚いたことにはCCD画素の欠損が見当たりませんでした。5年も放射線に曝されて3割くらいは死んでしまい、ボロボロの画像が降りてくるのではないかと危惧していたのです。このきれいな画像は私に「きれいな論文を書かねばいかんよ」と言っているようで、「これだから勝負」と身の引き締まる思いです。昨年夕空の明星を見ると涙がでましたが、今年明け空の明星をみると、「あそこを俺のカメラが周っているんだ」といい気分になれます。

1973年修士入学で本郷に来て居ついてしまい、以来なんと43年経ってしまいました。本当に夢のようです。本郷のみなさんありがとうございます。

## 岩上直幹先生を送る

星野 真弘 (地球惑星科学専攻 教授)

岩上先生は東北大学理学部天文および地球物理第一学科を卒業されたあと、本学地球物理学専攻の大学院に進学されました。博士課程のときに第18次南極観測に観測メンバーとして参加され、1980年に学位を取得されました。その後1981年に本学理学部の助手、1990年に助教授(のち准教授)を経て2013年に教授に昇進されました。

岩上先生のご専門は、地球・惑星大気の観測的研究です。地球上層大気の大気光・オーロラに始まり、地球オゾン層、金星大気などを対象として、観測機器の開発から地上望遠鏡および飛翔体・人工衛星を用いた分光遠隔測定において先駆的研究をおこないました。また最近では2015年12月に金星周回軌道への再投入に成功した「あかつき」ミッションにおいて、大気超回転生成機構を解明する1 $\mu$ mの赤外線カメラの開発責任者として研究を主導されています。

先生は、常に研究に対する情熱を熱く語れる方で、その魅力により多くの学生が先生の研究室で育っています。大気分光の学生実験や惑星大気学などの講義において、学生の目線に語りかける教育スタイルは、数多くの学生の記憶に残るものとなっていると思います。また先生の研究室は女子学生に人気があり、ほとんどが女子学生という時期もありました。研究のロマンのみならず、科学を基礎からしっかりと叩き上げる丁寧な教育に人気があったのだと思います。

岩上先生は、2010年末に軌道投入に失敗した「あかつき」衛星が金星から遠ざかって行った時、赤外線カメラで撮像した写真を見て我が娘が遠くに旅立ってしまうような気持ちだったのではないかと思います。退職後の4月からは宇宙科学研究所において研究をご継続されると聞いております。我が娘との再会を果たし、これからは金星の大気超回転機構の解明に向けてデータ解析に没頭されることと思います。今後益々のご発展をお祈り申し上げます。

## 激動とともに

今年満65歳で定年を迎える私たちは、歴史的にも稀有な運命にあった。大学受験を控えた高校3年生の1968年末、東京大学は大学紛争で荒れ狂い、安田講堂攻防戦の末、ついに1969年度の入学試験は中止になってしまった。後にも先にも、東大現役入学者が一人もない歴史的に唯一の学年となってしまったのである。文字通り「入りたくても絶対に入れなかった」ことを胸を張って言える唯一の学年となったのである。おまけに現在のように、センター試験で点数一列縦隊などもなかった時代である。

「右を見ても左を見ても、世の中真っ暗闇じゃありませんか」(傷だらけの人生：鶴田浩二歌)や「生まれた時が悪いのか、それとも俺が悪いのか」(昭和ブルース：天知茂歌)が大流行した中での青春であった。

しかし、同時に輝いていた時代でもあった。全国で荒れ狂う大学紛争を脇目に、1969年7月15日、アポロ11号によって、人類が初めて月に降り立ったのである。おまけに月面からのテレビ生中継。

時差となまりのある同時通訳、旗めかないアメリカ国旗、重力加速度の小さな月面でのジャンプ。

これほどまでに科学と技術で全世界を惹きつけたイベントは歴史にあったであろうか。

多くの子供たち、若者たちはこの科学に惹きつけられた。もちろん私も入学直後から封鎖が続く大学など行かずに、テレビに釘付けになった。そのとき、実は、ちょうど足元の地球に関する科学も、プレートテクトニクスという単純明快な新理論が登場し、人類の地球観を変えていたのである。地球観も、惑星観も、衛星観も、まるごと一気に変わる科学の革命の真っ只中にあったのである。これだ！

大学紛争もさることながら、この科学の革命の中で、どれほど人生が変わった人がいるであろうか。その意味で、振り返ってみると、「生まれた時は、悪くなかった！」と私には思えて定年を迎えることができることに感謝の気持ちで一杯である。

すべてのことが激動の時代に、わがままに生きてきた感があり、それは裏返すと多くの人に迷惑をかけてきたということである。定年の区切りに替えてご容赦いただければと思う。



木村 学  
(地球惑星科学専攻 教授)

## 木村学先生を送る

井出 哲 (地球惑星科学専攻 教授)

木村学先生は、北海道大学で学位を取得し、香川大学、大阪府立大学を経て、1997年に東京大学大学院理学系研究科の教授として着任されました。学内においては地球惑星科学専攻の専攻長を含む要職を務めるとともに、2006-2008年には日本地質学会会長、2007-2012年には日本地球惑星科学連合の会長と、まさに日本の地球科学の顔として活躍を続けてこられました。

地質学者としてフィールド観察に基づく様々な成果を挙げる一方で、最近の10年は、地球深部探査船「ちきゅう」を使った南海トラフ地震発生帯掘削という大型国際科学プロジェクトにも情熱を注いでこられました。厳しい気象海洋条件、相次ぐ機器トラブル、不足気味の予算、そして東北での巨大地震など多くの困難に見舞われながらも、海底3000メートルを超えて今なお掘削が続いているのは木村先生の卓越したリーダーシッ

プのおかげです。まだ誰も見たことのない、ナマのプレート境界物質が得られる日も近いことでしょう。

著書、ブログ、SNS等で広く発信されていた木村先生。その語りは多彩な内容がふれられない世界観に支えられていて、いつも聞く人を元気にします。ユニークな学生たちに囲まれ、いつも笑いの絶えなかった木村研が東大になくなるのはさびしいですが、国内外多数の研究者を巻き込んだ拡大木村研の活動はこれからも南海掘削を中心に続きます。これまでのご指導に感謝申し上げますとともに、今後一層のご活躍を祈念いたします。

## 万事塞翁が馬



中村 栄一  
(化学専攻 教授)

私は1951年2月24日に東大病院で生まれた。東工大から東大化学教室に異動した時に教室から医学部附属病院が目に見えることに感慨を覚えた。この4月からは、その生誕地に建った「分子ライフィノベーション棟」に研究室を持つことになるという数奇な巡り合わせだ。

高校3年の1969年の冬は安田講堂攻防戦をテレビ観戦した。1月20日に加藤一郎総長代行の入試中止受諾。ヘリコプター実況中継で安田講堂裏に見えていたのが化学教室とはつゆ知らず。急遽東工大向けに受験勉強をして3月3日、4日は雪の代々木ゼミナールでの受験。入学後、授業が始まらないままに東工大で知ったのが、「向山教授が化学では一番」。向山光昭先生はその後、文化勲章を受章された。運良く向山研で卒業研究を始めたところ、フラスコが爆発して全治半年の入院・自宅加療、さらに2月の第3週になって「俺は東大化学教室に行くのでおまえはここに残れ」との先生のお達し。桑嶋功先生の元で博士取得、コロンビア大学でポスドク、母校に戻って助手、助教授、教授となったある日、奈良坂紘一教授から「東大に來い」との電話。向山先生に遅れること20年、本郷に来ると化学西館の5階、私の居室から見えたのが今の内科研究棟、旧診療棟である。この一年、眼前に「イノベ棟」が立つのを見

てきた。平成24年度文科省補正予算を獲得して建てた「快適・健康長寿社会を実現するためのライフ・エネルギー分子技術イノベーション拠点棟」は、附属病院との話し合いの中で私が「命名権」を頂いて「分子ライフィノベーション棟」と名付けた。

一昨年2013年末に事務的には退職して教授(特例)となった私だが、この2016年4月から「革新分子技術」総括寄付講座特任教授として教育・研究を一層発展させる任務を戴いた。企業4社のご寄付によって2015年度から7年間、総長室に設置された寄付講座である。「産学連携反対」という学生紛争時代とは隔世の感がある。当初は55歳までに外国に移る予定だったが65歳定年に延び、今や更にもう少し東大にお世話になることになった。この任期の後はどうしようかと思案している。万事塞翁が馬。

総括寄付講座実現を強力に支援して戴いた五神真総長、松本洋一郎前理事、山形俊男、相原博昭、福田裕穂の歴代理学系研究科長および門脇孝前附属病院長そして化学教室の先生方に深く感謝すると共に、微力ながら今後も研究室メンバーと共に理学研究科・理学部のために寄与したいと心に誓っているこの頃である。

## 中村栄一先生を送る

小林 修 (化学専攻 教授)

中村栄一先生と私は同門でもあり、私がまだ駆け出しの大学院生だったころからお目にかかる機会がよくありました。当時新進気鋭の中村助教授はすでに学会や研究会で大活躍されており、我々の憧れの存在でした。

中村先生は1995年に物理有機化学講座を引き継がれ、有機合成化学によるものづくりを基盤にして、生命から環境に至る諸分野に波及する価値を持った有機化学を開拓されてきました。亜鉛、鉄、銅など種々の金属元素を用いる反応を開発、「元素戦略」というキーワードは中村先生のご発案とお聞きしています。さらに、銅触媒によるフラーレンへの五重付加反応を足がかりに、バトミントンシャトル型の分子が積み重なってできる液晶材料や二重膜ベシクルを創出するなど、フラーレン科学を大きく発展されました。2007年にはカーボンナノチューブ内に化合物を閉じ込め、電

子顕微鏡によって1分子の動きを観察することに成功されました。その後も、望みの分子を自由自在に合成することによって、太陽電池、有機EL素子、分子トランジスタなどの有機エレクトロニクスの開発や、遺伝子導入による疾病の新しい治療法の研究も展開されています。

中村先生は化学者としても超一流ですが、フルート奏者としてもプロ顔負けのご活躍をされています。定期演奏会の他にも様々な音楽活動をされており、昨年秋にはご退職を記念したCD作成のために蓼科にある音楽ホールに籠もられ、レコーディングをされたと伺っています。

中村先生が今後も研究・教育、さらには音楽と、ますますのご活躍されることを祈念申し上げます。

## 研究を始めた頃

定年を迎えるにあたって若いころのことが思い出されるので、それについて点描することにした。

山崎敏光先生、中井浩二先生が主催する研究室の門を叩いてから、四十数年。同期は、旭耕一郎くん（東工大・教授）。二人は中井先生の東大での初めての院生。旧理学部一号館二階の一室に机をもらい、まずはフォートランを勉強した。当時、研究室は、白金台の医科学研究所で建設中の医療用サイクロトロンでの研究準備を進めており、修士2年には新築のサイクロトロン棟が研究室となった。団子坂を登った辺りの下宿と医科研近くの古アパートが、私が山手線の内側に住んだ稀有な例となった。

博士時代は、阪大の杉本健三先生（中井先生の先生）の下で研究した。杉本先生が開発したベータNMR法を用いて、偏極 $^{12}\text{B}$ 、 $^{12}\text{N}$ をニッケル金属に打ち込み、これら不純物が感じるニッケル中での磁場や超微細相互作用の研究を進めた。強磁性・常磁性相転移温度近傍で核偏極の緩和時間が大きな変動する（critical slowing down現象）を見た。本番データを取った一ヶ月間は、野尻洋一助手の助けを借りて、毎日数時間寝る以外は一人のシフト（バンデグラーフ加速器の運転からデータ収集まで）を週に4～5日間連続で取り続け、終わった頃には体重が10キロほど減っていた。

博士課程2年の終わりに、原子核研究所の坂井光夫先生（当時、所長。最近お亡くなりになられた）のグループの助手に採用された。意見を求められた山崎先生は「原子核物理はよく知らないけど、良いですか？」と懸念を表明されたとのこと。実際、原子核については修士での勉強止まりで、至極もつともな評価ではあった。

原子核分野の優れた先達に追いつき追い越すのは至難の業と思ひ至り、ニューマトロン計画に強く惹かれた。計画が目指す「高エネルギーで原子核同士を正面衝突させることで高温・高密度原子核物質を生成し、その性質を調べる」は、原子核のフロンティアであり、物性研究に惹かれる私にはピッタリのテーマと思われた。1980年夏に、米国ローレンスバークレイ研究所ペバラック加速器での実験研究に参加し、結局のところ、ずっとこのテーマをやってきた。

これから何をやろうか。これまでの延長線でも面白そうな課題も結構あるし、新しい課題にチャレンジするのも一興と、アレコレ思いを巡らす今日この頃である。



浜垣 秀樹  
(原子核科学研究センター 教授)

## 浜垣秀樹先生の退職に寄せて

郡司 卓 (原子核科学研究センター 助教)

浜垣秀樹先生は、東京大学大学院理学系研究科で原子核物理を専攻され、博士課程2年の時に、原子核研究所の助手に抜擢されました。1998年に原子核科学研究センターの准教授、2012年より同センターの教授に着任されました。

浜垣先生のご専門は、強い相互作用が支配するハドロン・クォーク多体系に関する研究、特に、超高温で実現する新しい物質（クォーク・グルーオンプラズマ、QGP）の研究です。1980年代に小規模な実験から始まったQGPの実験的研究は、今では米国のBNL-RHIC加速器や欧州のCERN-LHC加速器を使った大規模な国際共同実験に発展を遂げています。浜垣先生は、RHIC-PHENIX実験では日本グループの代表を務め、QGP生成に関する国際的に評価の高い多くの成果を挙げられ、LHC-ALICE実験では副評議委員長を務めるなど、最前線で実験を牽引されています。

QGP研究がこのように大きく発展したのは、その黎明期から尽力された浜垣先生の貢献によるものです。

浜垣先生は学生教育にも熱心でした。特に、毎日の夕食や先生のご帰宅前(22:30頃)に行われる議論は有意義なものでした。今では、その教え子たちが多くの分野（物理、工学、経済物理など）で活躍しています。

浜垣先生の長きに亘るQGP研究のご貢献に感謝するとともに、ご退職後の充実した研究生活を祈念しております。今後ともよろしく願いいたします。

## 定年と卒業



蓑輪 眞  
(物理学専攻 教授)

定年退職というのは、学校を卒業するようなものではないかと思うことがある。小学校・中学校の卒業のときはまだ物心がついていなかったのだからあまりはっきりした記憶はない。高校を卒業して京都大学に入ったときに、ある日ふと気がついた。そう、これからは社会や現代国語などのきらいな科目の勉強はやらなくてよいのだ。そう、京都大学には進学振り分けがないので、いろんな科目でよい点数を取らなくてはならないということがない。思わず踊りだしたいくらいに楽しくなったことを覚えている。

次に、大学を卒業して大学院に入った。そこでまず思ったことは、これでもう試験というものとは縁が切れたということだった。定期試験も入学試験もなんにもない。これはうれしかった。なにしろ大学院入試の直前には夢の中で量子力学の調和振動子のハミルトニアンが出てきてうなされたことを覚えている。これから解放されるのだ。

大学院を卒業して、東京大学に来て助手になった。これからは自分の好きな研究をやることができ、おまけに給料までもらえるのだ。こんなうまい話が世の中にあるものか。この世に極楽というものがあるとすれば大学のことでないかと思った。

さて、定年もある種の卒業だと思ってみると、この卒業でどんな楽しいことが起きるのだろうか。東京大学の教員をしていて、つらかったり困ったりしたことがまったくないわけではなかった。具体的な話はとくに秘すが、もう少しで投げ出しそうになった、あんなことかこんなことかとはもうやらなくてもよいのである。来年はきっとのどかな気持ちで正月を過ごすことができるだろう。ああよかった。定年万歳！

ここまでの卒業の繰り返しでは、そのたびに必ず楽しい発見があったり幸せな生活が待っていた。私のような者を、すべてを肯定的にとらえる前向きな性格の人と見るか、あるいは単なる脳天気と見るかは意見の別れるところだろう。いずれにせよ、定年後にもきっと次の卒業が待ち受けているに違いない。え、そんなものがあるのかと思う人は大事なことを忘れている。それは「あれ」のことである。だれにでも必ずやってくる例のやつである。その卒業のときも何かすばらしいことが待っているのだろうか。たとえそうだとしても、できることならこんどばかりは在学年限ギリギリいっぱいまで留年をしたいものである。

## 蓑輪眞先生を送る

駒宮 幸男 (物理学専攻 教授)

蓑輪眞先生は、東大闘争で本学の入試が中止になった1969年に京都大学に入学され、同大学で理学博士を取得されました。1979年に本学理学部附属素粒子物理国際協力施設の助手になられ、1986年に助教授に昇格、1989年に物理教室に移って、2001年に教授になられました。

蓑輪先生は、もともとは高エネルギー加速器実験の専門家で、ドイツの当時世界最高エネルギーの電子・陽電子コライダー PETRA を用いた JADE 実験では、ハドロン生成全断面積を世界最高精度で測定されました。その後、非加速器素粒子実験に転向されて、宇宙の暗黒物質をポロメータの技術を駆使して探索しました。また、太陽方向を追尾しながら太陽中心部で生成されるアクシオンという粒子を探索するアクシオン望遠鏡を建設して、理学部1号館の地下で実験を行い、粒子フラックスの上限値を打ち立てました。最近

は、台車搭載のコンパクトなニュートリノ測定器 PANDA を開発し、原子炉ニュートリノの観測をしてきました。今は稼働原発が殆どないので、これを用いて雷での高エネルギー現象の研究もされています。このように蓑輪先生は、新しいアイデアで物理の本質を突くユニークな測定器を提案し、それをきちんと実機化して新物理発見への挑戦をされてきました。このような研究室には優秀な大学院生が集まり、多くの著名な研究者を輩出しております。

先生の駄洒落は高度で、教室会議の後ろの方では、故・和達三樹先生と駄洒落の応酬をされました。以前、臀部に注射針を刺すという変質者が学内に出現し教室会議でも問題になったそうですが、蓑輪先生は「あの辺りは駐車禁止なのにね」と眩かれたそうですが、「厳粛な」教室会議では全然ウケなかったそうです。私がいたら爆笑して差し上げたのに。

先生の風貌は退職されるお年には全く見えませんので、益々のご活躍を祈念いたします。

### 大学を去るにあたって

1995年に東京大学に着任して21年が経ちました。この21年間の理学系研究科の教員や職員の皆様のご支援に心からお礼申し上げます。地質学、鉱物学、地理学、地球物理学専攻の統合、国立大学法人化などいくつかの変動があり、研究と教育の環境に変化がありました。このご支援なしでは私の研究・教育の今日までの継続は困難だったであろうと思います。

私はポストクを含めて、いくつかの機関を転任してきました。その都度、新しいものの見方、アプローチの仕方を学ぶことができ、私の研究をより広くしていただきました。また、共同研究者の方々からの刺激でより豊かなものになりました。おかげさまで、充実した研究生活を送ることができました。学生時代の鉱物のみ（固体）を対象とした研究から始まり、地球表層での固体と液体と気体の相互作用の研究へと移っていきました。まず、元素の分配・移動を知るために鉱物と水の相互作用を研究しました。15～20年くらい前に、それに大気加わり、先カンブリア時代（地球誕生から約6億年前まで）の大気進化を知るために鉱物と水と大気の相互作用の研究を始めました。新しい研究に移る度に（急激ではなく漸次ですが）、希望が膨らみ、成果が出ると充実感を持つという、まさに研究の醍醐味を味わいました。

大気進化は、その研究が世界的に発展期に移る時期に始めたので、新しいことがわかる度に興奮しました。地質記録として残されているのは固体（鉱物や岩石）のみで、そこから大気酸素・二酸化炭素の濃度を算定する研究は、自分の研究史の最終段階として最適でした。

1993年に日本原子力研究所（現日本原子力研究開発機構）から愛媛大学に転任し、初めて教育に携わることになりました。研究のみから、教育第一に変化し、少し戸惑いましたが、これが実に楽しいことであることは、1年を経たすにわかりました。それは、学生がその柔らかい頭で、私が考えつかなかったいろいろなことを教えてくれたからです。議論は3時間、4時間に及ぶこともあり。そこにあるものは教師-学生という図式ではなく、互いに学び合う人々でした。感謝の気持ちで一杯です。

退職にあたっての文章なので、どうしても後ろ向きになりました。すべては過ぎ去りますので、学生の方は後ろを見ずに前を見て進んでください。最後になりましたが、理学系研究科が世界のシンクタンクとして、ますます発展することを祈ります。



村上 隆  
(地球惑星科学専攻 教授)

### 村上 隆先生のご退職に寄せて

小暮 敏博 (地球惑星科学専攻 准教授)

村上隆先生は1975年に東京大学理学部をご卒業後、1980年同大学大学院理学系研究科博士課程を修了、学位を取得されました。その後日本原子力研究所（現日本原子力研究開発機構）に就職し、1993年に愛媛大学理学部助教授に着任されました。1995年に本学理学部助教授に転任され、1999年に同教授に昇任されました。

「環境鉱物学」を標榜する先生はその40年近くの研究生活の中で、地球上での諸現象を解明する多くの業績を残して来られました。ウラン等のアルファ崩壊による鉱物中の微細組織の研究は非常に著名なものです。さらに地球表層でのウランの移動は、ウラン鉱物のナノ結晶化が重要であることを示され、この分野に新しいページを開きました。最近では先カンブリア時代の大気進化の研究を多くの学生と進め、室内実験や数値モデルをもとに独自の仮説を提唱されました。村上先生は音楽、

文学、美術などの芸術にも造詣が深く、お酒の席では楽しそうに話をされます。また友人並みのテニスの腕前など非常に多才な面をお持ちです。非常に温かなご性格であるとともに、周囲の人への気配りに長けており、東大では多くの人々に慕われ続けた学者生活であったと思います。先生は退職後も大気進化のご研究を続けられると伺っております。健康にご配慮されますとともに、今後の研究の益々のご発展をお祈りいたします。

### 38年間の思い出を振り返って



稲田 敏行  
(総務課長)

歳月が経過するのは早いもので昨年5度目の年男となり、還暦を迎え、3月に定年退職します。ここまで来られたのは、上司、諸先輩並びにまわりの皆様からのご指導いただいたお陰と感謝しています。

これまでの38年を振り返ってみると、1979年4月に東京大学に採用となり、茨城から上京し、独身寮に入寮し、初めての東京で不安で一杯でしたが、先輩や同僚と飲み会や草野球にと楽しく過ごすことができたことが懐かしく思い出されます。

東京大学に奉職以来、初めて大学共同利用機関である国立極地研究所に配属され、南極観測事業に係わることができ、南極の素晴らしさを知ることが出来ました。同時に法人化移行時期に遭遇し、社会労務士と一緒に就業規則等の作成・制定に没頭したことは貴重な経験をさせていただきました。東京大学人事部に戻り、保育園の立ち上げに従事することになり、これまで経験したことがないことで、当時男女共同参画室の理学系の村尾美緒先生の協力を頂きながら、何とか発足することが出来ました。その後、統計数理研究所に配属となり、南麻布から立川への移転や移転式典等の準備と、その対応に追われました。移転後は千葉市から片道2時間30分の立川通勤を9ヶ月間続けることになりました。東京大学経済学研究科に配属され、留学生の事務体制整備や学生のメンタルケア等の対策として、カウンセリング

室の設置に取り組みしました。

そして最後の3年間をこの理学系研究科で勤務することになりました。理系の学部は初めてで、この3年間は相原博昭先生、五神真先生及び福田裕穂先生の3人の研究科長に仕えることとなり、仕事の多さとスピード感に驚きながら、無我夢中で仕事をしてきました。仕事は大変でしたが、理学系研究科の発展に少しでも貢献できたことは誇りに思っています。理学系研究科は、臨海実験所、植物園、木曾観測所及びチリのアタカマ天文台の附属施設という財産を持っているのが魅力であり、アウトリーチ活動で社会貢献しているところは他にはないのではと思います。これらの施設を見る機会があり、私にとって良い思い出となりました。2013年11月にチリ・サンチャゴにおいて「知の創発」をテーマとして東大フォーラムが開催され、150名の先生達と参加する機会を頂き、イベント等で活発な議論が交わされ、学術的・人的交流が深められたことと、同時にアタカマ天文台の視察ツアーも企画して、先生達をご案内できたことは、私にとって一生に残る貴重な経験をさせて頂きました。

定年後は好きなテニスやゴルフを楽しみながら、第2の人生を歩んで生きたいと思います。これまで支えていただいたすべての方々に感謝し、今後の後輩の活躍を心から応援していきたいと思っています。

### バウムクーヘンをめざして



伊藤 すい子  
(化学専攻主任)

ふとしたご縁で、大学を卒業後、駒場の社会科学(現国際社会科学)事務室に非常勤として採用していただいた。それから38年、時の流れの速さに驚く。世間一般で東京オリンピックといえば、2020年を指すようだが、私は1964年に開催された東京オリンピックをまず思い浮かべる。昨年、江戸東京博物館で開催された「東京オリンピックと新幹線」展を観てきた。0系のあの可愛い新幹線開業が1964年10月1日、オリンピック開会式が十日後の10月10日、ついこの前の事なのだが、この展覧会であれから半世紀過ぎている事を思い知らされ軽いショックを受けた。時の長短・捉え方は人それぞれでもみな平等に与えられる、かつ決して戻す事はできない。就職は私にとって

大きな転機であったが、その後、常勤職員採用、長く在籍した駒場から本郷の理学系化学事務室への異動等大小の転機を抜ける時は、瞬間に時が過ぎていった。総じて、振り返ると、その時は目一杯のつもりでも、まだ随分余力があった。何かしてもしなくても時は過ぎていく。戻る事もできない、なら、やりたい事はまずやるべき、それを頭の片隅にしっかりと刻み第二の大きな転機を迎えたい。重ねていく星霜をこれからはもっと丁寧に重ねられたらよいと思う。バウムクーヘンだって後から焼く毎に量が少しずつ増えていくではないか。

この職場に身を置けたことに感謝し、お世話になった皆様に心より御礼申しあげます。

このほかにも理学系研究科からは、新井三枝子(生物科学専攻主任)さんが大学を去られます。長い間大変お世話になり、まことにありがとうございました。—広報誌編集委員会—